

## 1. はじめに

トルコ語<sup>2</sup>には、直接体験の過去を表す動詞接尾辞-*DI*がある。興味深いことに、この接尾辞にはこれから起こる「未来」の事象に使われる用法がある。(1)を参照してほしい<sup>3</sup>。

- (1) Ben git-ti-m!  
1SG go-PAST-1SG  
過去解釈「私は行った。」/未来解釈「私は行くよ！」

(1)は過去接辞が使われているが、過去の事実としての解釈と、状況によっては、後者の訳のようにこれから行う「未来」解釈もできる。本発表では以下、便宜的に前者を過去解釈用法、後者を未来解釈用法と呼ぶ。

この未来解釈用法は日常会話でも用いられる一般的表現であるにもかかわらず、あまり注目されておらず、ほとんど記述されていない。例えば、Göksel and Kerslake (2005) や Lewis (2000) はその文法書の中でこの用法について一切言及していない。また、林 (2013: 123) では「gel『来る』や git『行く』といった動詞の過去形は、ほんの数秒後あるいは数分後に話し手が実行しようとしている行為を表わすことがある。全く同様の文を過去時制の意味として解釈することも可能であるが、確定未来を表わす場合、主語は1人称に限られる」としている。しかし、その出現条件やその詳細の意味について詳しい記述はなされていない。

そこで、本発表では、複数の話者からエリシテーションによって得たデータを分析することで、未来解釈用法の出現条件を記述し、モダリティー性を持つことを主張する。具体的に出現条件は (A) 意志の宣言、(B) 要求への遂行の断言、(C) 脅迫、(D) 警告するときの4つに限られる。さらにこの限られた条件とそのモダリティー性により、動詞や人称・文のタイプが制約され、未来解釈用法の生産性が低いことを説明する。

本発表の構成は以下の通り：第2節でどのような構文を本発表で扱う未来解釈用法とするのかを示す。第3節では未来解釈の出現条件は4つに限られていることを明らかにし、形態統語的論制約について記述する。第4節ではその未来解釈の文がモダリティー性を持ち、さらに発話の力があることを主張する。第5節では、トルコ語の未来解釈用法についてチュルク諸語における位置づけを試みる。第6節は結論である。

2. 過去接尾辞-*DI*の未来解釈の文

本発表で扱う過去接尾辞-*DI*の未来解釈用法は、動詞語幹に接尾辞-*DI*と人称接尾辞がついた形で、過去解釈の構文と全く同じ形である。意味的には、過去ではなく、これから行う、または起きる事象、つまり実際にまだ起こっていないことに言及する。具体的には(1)の後者の解釈のような構文である。

<sup>1</sup> 本発表は、2018年5月8日に東京外国語大学における非公開研究会で発表し、有益なコメントを頂いた。特に、青山和輝、荒川慎太郎、榎本恵実、大谷直輝、岡本進、黒島規史、風間伸次郎、川村大、菅原睦、長屋尚典、野元裕樹、菱山湧人、日高晋介の各氏に感謝を述べたい。本発表の例文は特に出典がない限り、すべて Aslıhan Canik (女性、イスタンブル、20代)、Ayşenur Kavak (女性、アンカラ、20代)、Engin Kılıç (男性、イスタンブル、40代)、Sadullah Gültekin (男性、ウズバルタ、20代)、五十嵐 Müge (女性、イスタンブル、30代) らに判断していただいた。彼女らにも深く感謝したい。むろん誤りはすべて発表者の責任である。

<sup>2</sup> トルコ語は、チュルク諸語オグズ語群に属する。基本語順はSVOで、膠着語タイプの言語である。母音調和と子音交替があるため、本発表で扱う-*DI*も複数の異形態をもつ。

<sup>3</sup> 本発表で用いる略号は以下である：1-first person, 2-second person, 3-third person, ACC-accusative, AOR-aorist, DAT-dative, FUT-future tense, INF-infinitive, INT-interjection, NEG-negation, OPT-optative, PAST-past tense, PL-plural, PRES-present tense, Q-question marker, SG-singular.

一方、未来解釈用法と似ているが今回の考察の対象としないものもある。第一に、(2) のようなイディオムである。yaşa 「生きる」という動詞以外は例がないので本発表では扱わない<sup>4</sup>。

- (2) Yaşa-dı-k!  
live-PAST-1PL 「やった！」

第二に、(3) のように過去形の反復構文で、「今～しなきゃ(これが最後のチャンス)」と意味する用法がある。すべての人称が可能であり、比較的どの動詞にもつき、生産的である。本発表で扱う用法は、これから論じるように生産的ではなく、出現条件は限られ、統語的制限があるため (3) の用法は除外する。

- (3) Al-dı-n! Al-dı-n!  
buy-PAST-2SG buy-PAST-2SG 「(君は) 今買わなきゃ！」

### 3 未来解釈用法の出現条件と形態統語論的制限

未来解釈用法はどのような条件でも用いることができるわけではない。本節では、先行研究で言及されていないが、未来解釈用法の出現条件は以下の4つに限られることを指摘する。(A) 宣言、(B) 断言、(C) 脅迫、(D) 警告しているときであり、どの条件でも聞き手が必要である。さらにそれぞれについて形態統語論的制限があることを主張する。

#### 3.1 未来解釈用法の4つの出現条件

未来解釈用法の限られた4つの出現条件について詳しく記述する。

(A) **宣言**: 話者がその場を離れ、今すぐに次の行為に移りたいことを聞き手に宣言するとき (例 (4))。

- (4) a. Hadi, ben git-ti-im! b. Hadi, biz git-ti-k!  
INT 1SG go-PAST-1SG INT 1PL go-PAST-1PL  
「さあ、私は行くよ！」 「さあ、私たちは行くよ！」

(4)a の主語は1人称単数で、(4)b は1人称複数だが、この場合は聞き手を含まない除外の解釈である。そのため聞き手を誘う勧誘の文ではなく、聞き手に話者の意志を宣言するものといえる。この条件では、Hadi 「さあ」が共起することが多いが、その場合は必ず未来解釈である。

林 (2013) では「git『行く』といった動詞」をあげていたが、(5)a など他の意志動詞でも可能である。さらに、(5)b は、git 「行く」を伴い、(5)a とほぼ同義である。

- (5) a. Hazırlan-dı-m!  
get ready-PAST-1SG  
「準備するよ！」  
b. Hazırlan-ma-ya git-ti-m!  
get ready-INF-DAT go-PAST-1SG  
「準備しに行くよ！」

その他にも、kalk 「起きる」、yat 「寝る」、kaç 「その場を離れる (逃げる)」などの動詞でも可能である。yürü 「歩く」、yüz 「泳ぐ」も特定の状況 (話者が「歩きたい」、「泳ぎたい」という気持ちを聞き手に伝えたいなど) であれば可能である。つまり、状況次第で、今すぐ次の行動を起こしたいということを宣言する条件にあてはまれば、少数だが他の意志動詞も使うことができる。

<sup>4</sup> これは良いことが起きたことにより、これから先長生きするだろうという解釈の上で、未来解釈とする立場もある (Korkmaz 2003: 538)。

(B) **断言:** 聞き手による話者への何らかの行為の要求に対し、その行為をすることを断言するときである (例 (6) (7))。この条件は、聞き手の要求があって成立する<sup>5</sup>。相手の要求に対して、話者のその行為を行うという強い意志を断言する。他にも、götür「持ってくる」、al「取る、買う」、sus「黙る」などで可能である。

- |     |                    |     |                      |
|-----|--------------------|-----|----------------------|
| (6) | 相手から来るように呼ばれて      | (7) | 宿題をやるように言われて         |
|     | Tamam, gel-di-m!   |     | Ödev yap-ti-m!       |
|     | okay come-PAST-1SG |     | homework do-PAST-1SG |
|     | 「わかった、行くよ！」        |     | 「宿題をやるよ！」            |

(C) **脅迫:** 何らかの行為により脅すときである。危害をくわえるような動詞に付いて、脅すという強い意志を伝える (例 (8) (9))。他にも、döv「ぼこぼこにする」、gebert「殺す (俗語)」などでも可能である。

- |     |               |         |     |                |                    |
|-----|---------------|---------|-----|----------------|--------------------|
| (8) | Öldür-dü-m    | seni!   | (9) | Vur-du-m       | seni! <sup>6</sup> |
|     | kill-PAST-1SG | 2SG.ACC |     | shoot-PAST-1SG | 2SG.ACC            |
|     | 「お前を殺すぞ！」     |         |     | 「お前を撃つぞ！」      |                    |

(D) **警告:** すぐ後に起こるだろう事象に対して切迫し、警告するときである (例 (10) (11))。例えば、(10) では、会話の参加者は落ちそうなことに緊迫感を持っている場合に限られ、話者は落ちることを聞き手に警告する。他にも、çarp「ぶつかる」、yıkıl「壊れる」、çık「出る」などでも可能である。

- |      |               |           |      |               |           |
|------|---------------|-----------|------|---------------|-----------|
| (10) | Düş-tü-ø!     | Düş-tü-ø! | (11) | Dol-du-ø!     | Dol-du-ø! |
|      | fall-PAST-3SG |           |      | fill-PAST-3SG |           |
|      | 「落ちる！」        |           |      | 「いっぱいになる！」    |           |

### 3.2 未来解釈用法についての形態統語論的制約<sup>7</sup>

上記で述べた4つの未来解釈用法には動詞クラスと人称、副詞共起、文のタイプに関する制限がある。

**動詞クラスと人称に関する制限:** 第一に、未来解釈用法が意志動詞につく場合、(12)のように、主語は一人称のみに限られる。Git「行く」という意志動詞について、一人称 (12)a の文では未来解釈は可能であるが、二人称 (12)b、三人称 (12)c では未来解釈は不可能である。

- |         |                 |             |    |               |             |    |               |             |
|---------|-----------------|-------------|----|---------------|-------------|----|---------------|-------------|
| (12) a. | Ben             | git-ti-m!   | b. | Sen           | git-ti-n!   | c. | O             | git-ti-ø!   |
|         | 1SG             | go-PAST-1SG |    | 2SG           | go-PAST-2SG |    | 3SG           | go-PAST-3SG |
|         | OK 過去解釈/OK 未来解釈 |             |    | OK 過去解釈/*未来解釈 |             |    | OK 過去解釈/*未来解釈 |             |

第二に、-DI が非意志動詞につく場合は、(13)のように、主語はすべての人称が可能である。

- |         |                 |    |                 |    |                 |
|---------|-----------------|----|-----------------|----|-----------------|
| (13) a. | Düş-tü-m!       | b. | Düş-tü-n!       | c. | Düş-tü-ø!       |
|         | fall-PAST-1SG   |    | fall-PAST-2SG   |    | fall-PAST-3SG   |
|         | OK 過去解釈/OK 未来解釈 |    | OK 過去解釈/OK 未来解釈 |    | OK 過去解釈/OK 未来解釈 |

<sup>5</sup> これは言語外の要求でも可能である。例えば、話者が話しているのに対し、聞き手が聞きたくなさそうな顔をしたために、sus「黙る」を使い「わかった、黙るよ！」とすることができる。

<sup>6</sup> 興味深いことに、この条件では主格以外の動詞の項は対格のみを取る。動詞 vur- は、対格をとると「撃つ」という意味になり、与格をとると「殴る」という意味になる。(9) では未来時解釈が可能で、一方、与格をとる「殴る」(14) では未来解釈が不可能だということ。

(14) Vur-du-m sana!  
hit-PAST-1SG 2SG.DAT  
OK 過去解釈「お前を殴った。」/\*未来解釈

<sup>7</sup> 3.2 節の内容は Suzuki (2017) の内容を、新しくデータを加えて検討し直したものである。

本発表で明らかにした条件をこの制約に当てはめると、条件 (A) (B) (C) は意志動詞と、(D) では非意志動詞と共起する。以上の点を表 1 にまとめた。

表 1: 動詞クラスと人称に関する制限

	動詞クラス	人称
(A) 宣言	意志動詞	一人称のみ
(B) 断言		
(C) 脅迫		
(D) 警告	非意志動詞	制限なし

**副詞との共起:** 時を表わす副詞との共起パターンから未来解釈用法は発話時から非常に近い時点のみに言及するといえる。具体的には、未来解釈用法(15)a は、比較的遠い未来を指す *yarın* 「明日」と共起できない。一方、現在形 (15)b では *yarın* は共起でき、未来形 (15)c では発話時に近い時点を指す *hadı* 「さあ」、*şimdi* 「今」、*hemen* 「すぐに」などが共起できない。つまり、未来解釈用法は現在形と未来形で表わすより、発話時に近い限られた時点を指している<sup>8</sup>。

- (15) a. {Hadi/Şimdi/Hemen/\*Yarın} biz git-ti-k!  
 {INT/now/immediately/\*tomorrow} 1PL go-PAST-1PL 「OK さあ/OK 今/OK すぐ/OK 明日行くよ」
- b. {Hadi/Şimdi/Hemen/Yarın} biz gid-iyor-uz.  
 {INT/now/immediately/tomorrow} 1PL go-PRES-1PL 「OK さあ/OK 今/OK すぐ/OK 明日行きます」
- c. {\*Hadi/\*Şimdi/\*Hemen/Yarın} biz gid-eceğ-iz.  
 {\*INT/now/immediately/tomorrow} 1PL go-FUT-1PL 「\*さあ/\*今/\*すぐ/OK 明日行くつもりです」

**文のタイプ:** 文のタイプにも制限がある。未来解釈用法は疑問文 (16)a と否定文 (16)b に出現できない。

- (16) a. Biz git-ti-k=mi? b. Biz git-me-di-k.  
 1PL go-PAST-1PL=Q 1PL go-NEG-PAST-1PL  
 OK 過去解釈/\*未来解釈 OK 過去解釈/\*未来解釈

本節では、以上のように *-DI* の未来解釈用法が出現できる条件は 4 つのみに限られ、形態統語論的にも動詞と人称、副詞との共起、文のタイプに制限があることを明らかにした。

#### 4. 未来解釈用法のモダリティー性と発話の力

本節では、未来解釈用法はモダリティー性と発話の力があることを主張し、以下の二つの分析を提示する：第一に、未来解釈はモダリティー性と発話の力の意味から結果として時間的に未来に言及している。第二に、モダリティー性と発話の力によって、生産性が低いということを説明する。

##### 4.1 モダリティー性

Narrog (2012: 6) は、“Modality is a linguistic category referring to the factual status of a proposition. A proposition is modalized if it is marked for being undetermined with respect to its factual status, i.e. is neither positively nor negatively factual.” と述べ、モダリティーは叙述の事実性のステータスに言及する言語学的カテゴリーであるとしている。この Narrog による定義に従うなら、未来解釈用法もまだ起きていない、つまり非現実 (non-factual) の事象を表わすという点で、事実性のステータスに言及しているといえる。すなわち、これまで未来解釈用法としてきたものは、実はモダリティーにほかならない。例えば、(18) を見てほしい。

<sup>8</sup> しかし、発表者の新しい調査で、話者によっては (17) のように特定の状況で明日という比較的遠い未来にも言及することができるという揺れがあることが明らかになった。(Özsoy, A. Sumuru pers. comm.)

- (17) A: Yarın sinema-ya gel-ir=mi-sin? B: gel-di-m.  
 tomorrow theater-DAT come-AOR=Q-2SG come-PAST-1SG  
 A: 「明日、映画館に来ない？」 B: 「行きます。」

- (18) Ben git-ti-m!  
 1SG go-PAST-1SG 過去解釈「私は行った。」/未来解釈「私は行くよ！」

過去解釈の場合は、ある過去の事実として述べられている。しかし、未来解釈の場合は、話者がこれから起こしたい行動であり、発話時において事実ではない。未来解釈用法はモダリティー性をもつと分析できる。Narrog は、モダリティーに volitivity (volitive vs non-volitive) と speech act orientation<sup>9</sup>(speech act-oriented vs event-oriented) という段階的な二つの次元を導入している。Volitivity に関して、(A) (B) (C) の条件は volitive 的で、(D) の条件は、non-volitive 的である。Speech act orientation に関して、どの条件でも speech act-oriented 的である。以上を Narrog の分類に当てはめると、図 1 のようになる。

通言語的に過去マーカーがモダリティーをもつことはよくあるとされている。例えば、Palmer (2001) は、英語など多くの言語で過去時制のマーカーが条件文で使われ、反事実のモダリティーをもっていることをあげている。反事実とは異なる意味範疇で、トルコ語においても過去接辞-DI は、第 3 節で記述したような特定の条件に限ってモダリティー性を持つ。

図 1：未来解釈用法のモダリティー

speech act-oriented	(A) (B) (C)	(D)
event-oriented		
	volitive	non-volitive

#### 4.2 発話の力

Narrog (2013: 13) は、“A further step beyond modality and mood are illocutionary force and illocutionary force modification, i.e. the expression of the communicative purpose of an utterance, such as making a statement, a promise, or a prediction, and its modification.” と述べ、発話の力をモダリティーのさらに進んだ段階として位置づけており、それは発話の伝達目的の表現であるとしている。トルコ語の未来解釈用法はどの条件でも聞き手がいない独り言では使えず、具体的には以下のような効果を聞き手に伝える目的を持つ。

(A) 宣言の条件では、次の行為に移りたいという意志を聞き手に伝える。このことは未来解釈用法 (19)a、b を提案形 1 人称単数 (19)c と提案形 1 人称複数 (19)d の場合と比べるとよくわかる。(19)c は意志を表わすが、独り言も可能であり、聞き手に反応は求めている。(19)d は聞き手を含む勧誘になる。対して、(19)a、b は話者 (たち) の行きたいという強い意志を聞き手に宣言するという目的がある。

- (19) a. Git-ti-im.                      b.              Git-ti-k.                      c.              Gid-eyim.                      d.              Gid-elim.  
 go-PAST-1SG                              go-PAST-1PL                              go-OPT.1SG                              go-OPT.1PL  
 「行くよ！」                              「行きます。」                              「(私は) 行こう。」                              「行こう。」

(B) 断言の条件では聞き手の要求に対して、今すぐ行うという話者の意志を聞き手に確約する。(20)a は (7) と同文である。(20)a は、3.1 節でも述べたように、相手の要求があり成立するが、(20)b は要求がなくても成立する。つまり、(20)a は相手の要求にその行為をすることを断言している。

- (20) a. Ödev                              yap-ti-m!  
 homework                              do- PAST-1SG  
 「宿題をするよ！」
- b.                              Ödev                              yap-acağ-ım.  
 homework                              do-FUT-1SG  
 「宿題をします。」

(C) 脅迫の条件では、話者が聞き手に脅威を伝える。(D) 警告の条件では、切迫した状況のみ可能である。

<sup>9</sup> 発話行為の状況、つまり、話者自身の発話状況における発話時の判断、話者の聞き手もしくは発話状況への注目に直接関連していると、speech act-oriented とみなされる (Narrog 2012: 49)。

話者も聞き手も起こる事象に切迫性を持ち、聞き手に警告する。独り言では使えない。

本節では、以上のように未来解釈用法はモダリティー性と発話の力をもつことを指摘した。このことから、以下の二点の分析を提示する。

- (21) a. 未来解釈用法を従来の先行研究では、「未来」を表わす用法としているだけである。例えば、林 (2013) では「確定未来」、Korkmaz (2003) では、「未来の時間」(gelecek zaman) を表わすとしている。しかし、未来解釈用法は、モダリティー性と発話の力の意味から、結果として、時間的に未来に言及しているのであって、未来表現そのものではなく、モダリティー表現に他ならない。
- b. 未来解釈用法は、出現条件とモダリティー性、発話の力の意味に応じて、それに当てはまる動詞や人称、文のタイプ が限られ、結果的に生産性が限られている。

## 5. チュルク諸語における位置付け

他のチュルク諸語にもトルコ語の未来解釈用法と似たような現象がある。例えば、サハ語ではトルコ語の *-DI* にあたる過去接辞が「口語では話し手の意志を表したり、聞き手の意志を尋ねるのに用い」たりする (江畑 2006: 31)。一人称/二人称主語が可能であり、一人称複数の場合は聞き手を含む勧誘表現である。さらに、疑問文も可能である。ウズベク語では、トルコ語の *-DI* にあたる過去接辞が「時に確定未来を表わす」という (中嶋 2015: 79)。ウズベク語でも (22) のように一人称複数は勧誘である。

- (22) A: Oshxona-ga ket-di-k, bor-a-miz=mi? B: Ket-di-k.  
cafeteria-DAT leave-PAST-1PL go-PRS-1PL=Q leave-PAST-1PL  
「私たちは食堂に行きましようか？」 「行きましよう。」 (中嶋 2015: 79)

一方、トルコ語では上記で述べたように、疑問形は不可能であり、人称の制限が異なっている。さらに、一人称複数は勧誘表現ではない。トルコ語は、他のチュルク諸語とは少なくとも以上の相違点がある。出現条件、生産性、使用頻度の点でも大きく異なるかもしれない。そのため、過去接辞で「未来」を表現する用法はチュルク諸語で共通しているように見えるが、まずは個別にこの現象を議論する必要がある。そこで、本発表ではトルコ語におけるこの現象を個別に記述することに努めた。

## 6. 結論

本発表では過去接尾辞 *-DI* が未来解釈をもつ 4 つの条件を明らかにした。そして先行研究では、「未来」と記述されていたのだが、本発表ではモダリティー性をもつと主張した。さらに、この限られた条件とそのモダリティーの制約により、動詞は限られ、生産性が低いということを説明した。

## 参考文献

- 江畑冬生・Nadezhda Popova. (2006) 『サハ語文法』 東京：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所/  
林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 白水社./ 中嶋善輝 (2015) 『簡明ウズベク語文法』 大阪大学出版会。  
/ Göksel, Aşlı & Celia Kerslake. (2005). *Turkish: A Comprehensive Grammar*. Oxon: Routledge Press. / Korkmaz, Zeynep. (2003). *Türkiye Türkçesi Grameri: şekil bilgisi*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları Press. / Lewis, Geoffery. (2000). *Turkish Grammar*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxford: Oxford University Press. / Narrog, Heiko. (2012) *Modality, Subjectivity, and Semantic Change*. New York: Oxford University Press. / Palmer, F. Robert. (2001) *Mood and Modality*. 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge: Cambridge University Press. / Suzuki, Yui. (2017) When the past suffix means future: An analysis of *-di* in Turkish. Second Asia Junior Linguistics Conference. International Christian University, Tokyo. December 8-10, 2017.